
鯉の恩返し

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鯉の恩返し

【Nコード】

N5996Q

【作者名】

Rail

【あらすじ】

昔々、与吉という男が病気の父親のために鯉をとろうとしておりました。苦勞の末に捕まえた鯉でしたが、まだ小さい鯉を哀れに思

い――

昔々、山奥の村に与吉という百姓がいました。

与吉には歳をとった父親がいて、ある冬に悪い風が吹いた日から体調を崩していました。

与吉は父親に早く良くなってほしいと思い、栄養のつく物を食べさせようとするのですが、冬の枯れ野山では大したものも取れず、また貧乏なために買うこともままなりません。周りの家々も与吉の家とそれほど変わりませんでしたので、近所の人々に頼ることもままありませんでした。

それでも何とか父親に元気になって欲しいと願った与吉は、家の近くにある大池に鯉が住んでいるという噂を思い出しました。鯉は病に聞くと言いますので、与吉はなんとか捕まえてやろうと慣れないながらも大池に小舟を浮かべ、網を投げて魚を取ろうとしました。寒さに凍えながらも幾日も幾日も与吉は鯉を取ろうとするので、鯉はおるか、網には魚の一匹もかかりません。その間にも与吉の父親の体調は悪くなるばかりです。

とうとう思いつめた与吉は、今日鯉が取れなければいつそ町へ出かけて盗みを働いてしまおうと決意してしまいました。

すると天が味方したのでしょうか、最後の最後と決めて投げた網に、鯉がかかったのです。

与吉は喜び勇んで家に帰ると、父親に鯉を捕まえたことを報告しました。

けれども桶の中に泳ぐ鯉を見た父親は言いました。

「与吉、その鯉はまだ小さい鯉じゃないか。食べてしまつては可哀想だよ。元の大池に放しておやり」と。

確かに父親の言うとおり、与吉の捕まえた鯉はまだ小さい鯉でした。与吉は父親の体調を心配して少しばかり渋りましたが、それで

もやはり小さな鯉が哀れに思えてきたので元の大池に放してやることにしました。

「ひどいことをしてごめんよ。どうぞお帰り」

そう言つて与吉が鯉を元の池に放しますと、鯉はぴちゃんとして一度跳ねてから池の奥底へと潜っていきました。

その日の夜のことです。与吉の家の戸を叩く人がありました。

「もし、この雪で道に迷つてしまいました。一晚泊めてくださいませんか」

与吉が戸をあけると、そこにはとても美しい娘が立つておりました。与吉は驚いて言いました。

「娘さん、うちは見ての通り貧乏で、大したもてなしもできません」とすると娘は首を横に振りました。

「構いません、泊めてくれるだけでよいのです」

娘は長いこと外にいたのか肌が青白くなっており、今にも倒れてしまいそうな様子でした。その様子があまりにも気の毒でしたので与吉は娘を家に入れてやり、一晚泊めてやることにしました。

さて、夕餉の準備をしながら粗末なものを出すことに与吉が内心で恥ずかしく思っておりますと、娘が言いました。

「泊めてもらうお礼に、私に料理をさせてくださいませ」

与吉は少しばかり迷いましたが、娘が何度もそう言いましたので、任せることにしました。

娘は言います。

「どうぞ、私が準備をしている間はその様子をのぞかないでください」

与吉は不思議に思いましたが、何かわけがあるのだろうと深く考えずにうなずきました。

さて、その日の夕餉を食べて与吉も与吉の父も驚きました。

麦飯はいつもの通りでしたが、添えられた菜は美味しく、さらに汁は出汁がきいていて大層美味しかったのです。

「娘さん、これは一体何の汁なんだい？」

与吉の父親が尋ねますが、娘は微笑むばかりで答えませんでした。

さて、一晩だけと言っていた娘は翌日もその翌日も与吉の家にとどまり、そのまま出ていく気配もなく与吉の家にいました。与吉も娘のことを憎からず思っていましたので、それを咎めることはありませんでした。

娘の用意する食事は大層美味しいものでしたし、それのおかげか与吉の父親も日に日に元気になっていきました。

与吉は大層満足していましたが、気になっていることもありませんでした。

娘が日に日にやせ細っていくようなのです。

来たときはふつくらとした頬も、最近ではどこかけてきたようですし、肌も荒れてきたように思えます。娘に理由を尋ねましても、気のせいだと誤魔化されるばかりでした。

娘は器量が良いばかりか働き者で気立てが良いものですから、どうにか元気になって欲しいと与吉は考えました。

そしてある時与吉は気付きました。娘の元気がなくなるのは、決まって食事の準備をした後なのです。てっきり食事の準備が大変なのかとも思いましたが、働き者の娘が疲れているところなど与吉は見たことはありませんでしたので、娘の様子が変わるのはこれが原因に違いないと思いました。

決して覗くなどと言われた食事の準備の風景を、ある夜与吉はこっそりと覗き見ることにしました。

与吉が様子をつかがっていることなど露知らぬ娘は、飯を炊いて手ぎわよく菜の準備をすると、汁を煮る鍋の前へと立ちました。

なんと次の瞬間、娘は一匹の鯉となり、煮えたぎる鍋の中に飛び込んだのです。そしてその中をゆらゆらと泳いでいます。

そして一通り泳ぐと鍋から鯉が飛びだし、それは元の通り美しい娘となりました。

思わず与吉が驚いて尻もちをつきますと、その音に気付いた娘が振り返りました。

「見てしまったのですね」

娘は悲しそうな顔をしました。

「私はあなたが助けてくれた鯉です。恩返しがしたくてこのように人の姿になつてやつてきたのです」

与吉は驚いて息もできません。

「正体を知られたのならば、帰らなくてはなりません」

そう言つと娘は、止める与吉を振り切つて大池の方へと駆けて行きました。

そして池のほとりから身を投げると、娘は鯉となつて再び池の奥底へと消えていったのでした。

それ以来娘が帰ってくることはありませんでしたが、与吉が大池のほとりで娘の名前を呼ぶと、一匹の鯉が姿を見せ、己の息災を知らせるために大きく水面に跳ねるようになったのでした。

今でも大池のほとりで娘の名前を呼ぶと、大きな鯉が姿を見せるそうです。

（後書き）

兵庫県のある町に伝わる昔話をアレンジしたものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5996q/>

鯉の恩返し

2011年2月3日04時25分発行